

自由を求めた彼女の冒険譚

青空の愛犬家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自由の国に生まれた彼女”ヒナ”は自由を掲げて生きている。冒険者協会に入会し、自分の好きなこと、好きなだけにしてこの世界を今日も生きていく

ここまでは普通の冒険者と変わりはない。しかし極めて特殊なのが、彼女には得意武器がない。言い方を変えると、何でも自在に使うことができる

そんな彼女の自由で楽し気な冒険の旅路。

目次

キャラについて	
キャラ紹介 ヒナ	1
キャラ紹介 翠果	4
本編	
始まりの話	6
かの風を探して	9
世界と対峙する者	15
いつも通りの日常と非日常	22
モンド周辺の変化	27

キャラについて

キャラ紹介 ヒナ

『ヒナ』

誕生日 10月22日

所属 冒険者協会

神の目 氷

命ノ星座 武神座

冒険者協会にて彼女のことを知らないものはいない。それは彼女がどこの冒険団に入ろうとしないからだ。自由の国に生まれた彼女は他の誰よりも自由を追い求めている

キャラ詳細

冒険者協会でも指折りの逸材として語られる彼女は、いつも自由を生きがいに行っている。依頼があれば受けるし、依頼がなかったらんびり過ごす。自分のやりたいことをやりたいたいでいきている(ちゃんとモラルの範囲内)。しかし心優しい彼女は、何か困った人がいるとすぐに手を差し伸べて助けるので、自分のしたいことができないうきの方が多い。このことを彼女は「まあ自分のしたいことだけが”自由”じゃないからね」と半ば諦めているような回答をする

キャラストーリー1

何事にも囚われたくない彼女だが、ただ一度だけ囚われる決心をしたことがある。それは冒険者協会に入会したときだ。結構自由な冒険者協会だが、彼女は「囚われる」ということを覚悟しただろう。しかし、そんなことは当然なく、今も彼女は元気に冒険に出かけていることだろう

キャラストーリー2

〈モンドの危機〉投稿後解放

キャラストーリー3

〈自由と風〉投稿後解放

キャラストーリー4

〈ヒルチャールの仮面〉投稿後解放

キャラストーリー5

〈火花騎士と自由騎士〉投稿後解放

神の目

〈自由の意思〉投降後解放

七国について

〈夢の跡〉投降後解放

◇ヒナ詳細

武器

”特に秀でた”得意武器はない。逆にいえば、全ての武器を均等に扱うことの出来る。そういう面から見ても、彼女は逸材であろう

しかし対等に扱えても得意不得意があるため、使わない武器もある。例えば……長器槍系はリーチが長いのが特徴だが、その特徴が仇となる時があるため、あまり使わないんだとか？よく使うのは、弓や法器。片手剣など……

元素スキル「幼き夢」

自身の周りに氷のシールドを張り、チーム全員にヒナの上限HP×82%の継続回復を与え、同時に攻撃力50%・会心率79%UP。シールドの継続時間は23秒

元素爆発「自由の刃影」

付近の敵を自分の前に引き寄せ、氷の刃影（矢）を飛ばす。敵に命中した場合、ヒナの攻撃力の250%のダメージを連続六回与え、さらに命中した敵に、—45%の防御力ダウンのデバフを与える

好きなもの・嫌いなもの

稲妻の料理、緋櫻餅が大好物。鎖国令が出される前の話、彼女の祖父に当たるものがお土産として買ってきたところから、彼女の緋櫻餅好きが始まった

嫌いなものは、お肉ツミツミ。肉々しいのが嫌いなんだとか？どち

らかというと、ベジタリアン？

キャラ紹介 翠果

『^{すいか}翠果』

誕生日 4月24日

所属 璃月港

神の目 風

命ノ星座 木葉座

仙人の父と人の母を持つ半人半仙の女の子。とある理由があつて手紙を主に配達する配達屋へ快天亭で働いている。仕事熱心でかわいいところもあるが、いたずら好きという困った一面を持つ

キャラ詳細

ある時、少女は快天亭の店主に助けられた。それ以降快天亭で働いている

璃月からモンドまでの道のりを半刻を経たずに移動することができる彼女は、“何か”を探してその力を行使している。快天亭の仕事はその一環に過ぎず、真の目的は……

キャラストーリー1

いつの日の事だろうか……彼女は空を見上げると思い出すことがある。―それは悲しい記憶―否、記憶とはまた違うもので、いわば記憶の断片のようなものだ。悲しいという感情が出てくるが、それが何故悲しいのかは分からない。彼女にも……他の誰にも分からない

だか、ただ1人……その秘密を知るものがある

キャラストーリー2

〈モンドの危機〉投稿後解放

キャラストーリー3

〈^{つむしかぜ}旋風？いえ、彼女です〉投稿後解放

キャラストーリー4

〈今、知らされる真実〉投稿後解放

キャラストーリー5

〈それでも私は……〉投稿後解放

快天亭について

〈快天亭到着！〉投稿後解放

神の目

〈今、知らされる真実〉投稿後解放

◇翠果詳細

武器

彼女が使う武器は法器。その力背に背負うカバンには数々の国の地理誌や伝承、またはルールなどが書いてある本が入っている。彼女は暇な時それを読んだりするため、戦闘の能力は無くとも知識や元素攻撃などに至っては他のキャラに負けていない（攻撃力は低めだけども）

元素スキル「ひと時の休憩」

チーム全員に翠果のHP上限12.0%+256即時回復。スキル継続時間内、チーム全員の防御力10%up・移動速度+20

ーそれはひと時の休憩。一刻一刻を堪能して体を休めなければならない。元素を多大に使う彼女には必要なものなのだ

元素爆発「お届け物でえええす!!」

一定範囲内にいる敵に手紙を飛ばし、自身の基礎攻撃力×15%の攻撃に加え、ランダムで凍結・過負荷・蒸発・拡散が起きる（基礎攻撃力×3%）+自身の攻撃力15%down（スキルクールタイム）

好きなもの（こと）

好きなことは、木々の隙間から木漏れ日に当たることだという…幼い頃のことを思いだし、自分の気持ちを整えることができ、自分のしなればならないことを改めて考えることができるからだ

嫌いなもの

争いごとというの好きではない。なんというか……本能的に嫌味嫌っているらしい。なぜ嫌味嫌っているか、彼女にもわからない

本編

始まりの話

「♪♪♪…」

私の上機嫌な鼻歌が自由の国《モンド》に響き渡る。心地の良いこの国では、歌っていないと気がすまないのだ

私は多少のモラと呼ばれるお金を持って、自分が所属する”冒険者協会”に顔を出した

？「星と深淵を目指せ！おはようございます。」ヒナさん」

サラリと冒険者協会の座右の銘を言いあげ、私の名を口に出す彼女は冒険者協会の看板娘―キャサリンだ。年中無休でカウンターに立ち、数々の冒険者と会話する謎の多い女性：噂では機械なんじゃないか―とか囁かれているが、私には関係ない

っていうかそんな噂を流したやつも失礼だよね。こんな可愛らしい女性に対してそんな戯言を言うなんて…

―と思考が脱線しそうになったことを自覚し、慌てて自分がここに来た理由を思いだす。―そうだ。私は任務を受けに来たんだった

ヒナ「キャサリンさん。今日の依頼とありますか？」

キャサリン「いえ、今日の依頼はありませんが…あなたにお手紙が届いています」

ヒナ「手紙？誰から？」

キャサリン「西風騎士団セレユロスの代理団長様からです」

ああ、いつものことか―と思いつつ手紙の中身を見た

―内容としてはこうだ。私の実力がすごいから是非西風騎士団に来てくれないかとのこと。恐らく私を入団させる気だろうが、私としては入る気はない。だって入ったら…自由に生きれなくなりそうだし…

私は常に自由を掲げて生きている。この国モンドで生まれたからというものもあるだろうが、飽き性で熱が入りにくい私の性格上どこかに入っているという状況は無理に等しいのだ

キャサリン「まあそんな暗い顔なさらずに、一度だけ行ってみたらどうです？」

ヒナ「嫌。騎士団本部まで行くのめんどくさいんだもん」

？「ほほう…ならその願い。俺が一つ解決させてやろう」

私たちの会話に入ってきためんどくさそうな男。蒼い髪でなんか白いもこもこしているものを首の付近の巻いている。私は初めて見る人だから少し警戒した

？「そう警戒しなくていいじゃないか。俺は君に攻撃を仕掛けるわけじゃあるまいし、君と話がしたいんだが」

ヒナ「あなたは誰？なんで私と話がしたいの？」

ガイア「急な質問攻めだな。俺の名はガイア、西風騎士団騎兵隊長のエリートだ。そして君と話がしたいのは君の力が優秀だから西風騎士団からの依頼を受けてくれないか…といった感じだな」

ヒナ（…そんなこと言って…隙あれば入団させる気で―）

ガイア「―そんなこと言って隙あれば入団させる気だろう―とか思っているか？残念だが、そんなことはない」

私の心を読んだかのように話すガイアには少し困惑したが、悪い人ではないようだ

ガイア「少しは警戒が解けたみた―」

その時、強烈な風がモンド城を襲い始めた

空は風の壁によって封じられ、黒くくすんでいる。そこに、一頭の青い龍が飛来してきてモンドを襲った

私はそのことを呆気にとられ、ただ空を見続けるだけだったが、ガイアは静かに口を開いた

ガイア「予想より早かったな…」風魔龍「

ヒナ「風魔…龍？最近の暴風はあいつが…？」

ガイア「ああ。近頃、風龍廃墟で活発的な動きがあつてな。君に調査を依頼しようとした矢先だったのだが…手間が省けた。よし、君」

ヒナ「な、なんです？」

ガイア「あれを共に撃退しようじゃないか」

…無理難題じゃない？体長10メートルくらいの龍を撃退しよう

と思ってるなんて無謀すぎる…とか思っていると、誰かが飛行できる風の翼を使い、一人で風魔龍に立ち向かっていたのだった

そこで私は自分の元素を使い、その人を観察し始めることにした。…白い服、金髪の美少女…私の知識から察するに、彼女はこの世界の人ではなさそうだ

ガイア（ほう…面白い元素の使い方をするな…まさか氷をレンズ代わりに使うとは…やはりこの人に頼むのが正解かな）

ヒナ「…あ！ガイアさん！風魔龍逃げていきますよ！」

ガイア「お、本当だ。なら俺は彼女に話を聞かなくては…それと、君」

ヒナ「私ですか？」

ガイア「さっきの元素の使い方、実に面白かった。堪能させてもらったよ。俺の話、覚えているか？」

確か、風魔龍の調査だったっけ？と頭の中からひっぱり出す

ガイア「覚えているみたいだな。なら話は早い。どうかだ？やっつけてくれるか？」

ヒナ「…不安ですけど、やってみますね」

ガイア「いい顔だ。それじゃ頼むぞ？」

そういつてガイアはひらひらと手を振って大聖堂前広場に向かって行った

なんだか奇妙な人だったなと思いつつ、私はモンド城から出た

かの風を探して

…モンド城から出て、すぐに異変に気づいた。モンドの領域に先程の風魔龍なるものと酷似した力を感じたからだ

私はすぐに調査を始める……とは行かなかつた。久しぶりにあの場所へー風立ちの地にある巨大な神木からこぼれる木漏れ日の様に、優しく体を通り抜ける風を感じたいからだ

…そんなことをしていたら、風魔龍が再びモンドを襲う可能性があるだろうって？

そんなすぐに傷が癒えるはずがない…と、思う

ヒナ「それに…あの場所はモンドの風が集う場所でもあるし…」
そう。調査にもってこいの場所なのだ

そこに集う風から今この地に漂う風魔龍の痕跡を探して…と言った感じに出来れば最高なんだけど、私は魔術師じゃないからそこまで出来ない。でも、私だって法器は使える。そこまでじゃなくてもそれに近いことは出来だろう

私はそう願いつつ風立ちの地へと足を運ばせた

風立ちの地

ヒナ「すうつ……ふぁ……」

巨大な神木から漏れ出る空気はとても澄んでいて心地がいい。それだけでなく、心から元素を感じられるというか…なんとというか…表現が難しいがとにかく心が洗われるようなそんな気がするんだ

…♪♪…風の音に混じってどこからか澄んだ綺麗なライアーの音が聞こえる。♪♪♪とその音は風と共にあるかのように私の耳に入ってくる

ヒナ「一体どこから……あ
? 「ん?」

その時、神木の目の前に座る優しげな……優しげな……青年? 少女? が私の方を向いて目を丸くしていた。その手には、傷1つないライアーが納められていることから、恐らく彼(?) が先程のライアーの音を奏でていた本人だろう

? 「こんにちわお嬢さん。なにか困りごとかな?」

ヒナ「……先程の音は……あなたが?」

? 「うん、ボクさ。どうだったかい? 感想を言つて貰えるとボクも嬉しいんだけど」

ヒナ「風の音と共にあるようだった……初めて聞いたわ。あなたのよ
うな音を奏でる吟遊詩人は」

ウエンティ「あは! 君、目がいいね! ボクは自分で吟遊詩人だとは名乗ってないのにそれを見抜いた。ボクはウエンティ。ただの吟遊詩人さ。ねえ! 君の名前はなに?」

ウエンティと名乗る奇妙なオーラを撒き散らかす謎の吟遊詩人は、私の名前が気になるようで……だから普通に名乗った

「するとウエンティは、的確なアドバイスをありがとうと言って手を差し伸べた

ウエンティ「ねえ、ヒナって呼んでもいいかい?」

ヒナ「もちろん! 私もウエンティって呼んでもいい?」

ウエンティ「ああいいよ。君とは馬が合いそうだしね♪それで……ヒナ。なにか困つてたみたいだったけど? なにかあったのかい?」

私はモンド城内であつたことをありのまま話した

するとウエンティは突然地図を出して、3つほど目印をつけた。そこは、西風の鷹の神殿と北風の狼の神殿、そして南風の獅子の神殿がある場所と同じだった

ヒナ「これって……?」

ウエンティ「そこには”トワリン”の力の結晶がある。それを破壊することでトワリンの力は減少される」

ヒナ「トワ……リン? それって……」

ウエンティ「うん。モンドを護る四風守護の1柱。東風の龍・トワリン。それが今みんなが風魔龍って読んでいる龍の正体さ」

しかしどうして、モンドを護る龍がモンドを襲うのだろうか…時代と共に忘れ去られたことへと復讐心なのだろうか？それとも…いや、考えないことにしようと思いをそこで止めた

ヒナ「ありがとうウエンティ。でも、どうしてそんなことがわかるの？」

ウエンティ「ライアーので音と共に感じるんだ…彼の叫びが…」

ヒナ「……」

ウエンティ「とにかく、このことを西風騎士団へと、報告した方がいいね。それじゃ、またね！」

ウエンティは鼻歌を歌いつつ、どこかへと行ってしまったのであった

ヒナ「………ってことがあったんですよ」

私は偶然にも西風騎士団本部前にいたガイアに先程のことを報告した。ウエンティの言っていたことが怪しいから調べに行ったけど、全く持ってウエンティの言った通りだった

ガイア「なるほどな。風魔龍の力の源か…」

？「あら？あなたまたサボってたの？」

ガイア「お、ちょうどいいところに来たな、図書館司書」

呆れ顔で西風騎士団本部から出てくる金髪の女性は再びガイアに呆れ声を出す

紫色の帽子や紫色の服を着ていて、なおかつ胸元に雷元素を示す綺麗な紫色の神の目があった

「図書館司書…とガイアに呼ばれていたが…」

ガイア「風魔龍のことで進展がな。彼女達は中にいるか？」

？「ええいるわ。それより、そちの可愛子ちゃんを紹介して欲しいのだけれど？」

ヒナ「か、可愛子ちゃん?!」

リサ「ええそうよ。可愛子ちゃんには自己紹介しなきゃね。私はリサ。ここの図書館の司書をしているわ。それであなたは何者かしら?」

リサと名乗った彼女に私は自己紹介をした

リサ「ヒナ：良い名前じゃない。お姉さん気に入ったわ」

ヒナ「よろしくお願いしますね!リサさん」

リサ「あなたみたいな素直な子、お姉さん大好きよ」

ガイア「2人の話を邪魔しそうで悪いが、とにかく中に入ろうじゃないか」

ガイアは私達を置いていくような形で西風騎士団本部へと入っていく

その様子を見て再び呆れ声をあげる

リサ「全くあの人は…」

ヒナ「リサさん、ガイアのこと嫌いとかですか?」

リサ「いえ?別に嫌いじゃないわよ?ただジンに連れ戻しできてくと頼まれたからよ。さっ、私達も行きますよ?」

ヒナ「え、私もですか?」

リサ「ジンからの手紙が届いてるでしょう?だからあなたもよ」

リサはその華奢な腕で私の手を取り、そのまま西風騎士団本部へと連れられた

西風騎士団本部はとても綺麗で、私の堅苦しいイメージとはかけ離れていた。もっと騎士が沢山いるものだと思っていたが全然おらず、見張りが2、3人いる程度だった

リサさんは、代理団長室と書かれた部屋の取っ手に手をかけ、その部屋に入ってしまった

ガイア「やつと来たな」

?「お前もさつき来たばっかだろ!」

ガイアがそう言うと、例の金髪の少女の近くに浮遊している謎の人?が反論した

服装から見るとモンドの人ではなく、どこからきた旅人のようだ

ガイア「まあそう細かいことは気にするな。さて代理団長、話を始めようか」

ジン「ああそうだな、君とは初対面になるな。私は西風騎士団代理団長、蒲公英騎士ジンだ。そしてこちらの人は先刻風魔龍を撃退してくれたモンドの恩人」

蛍「蛍です。そしてこっちの…ペット？は—」

？「おい！だからオイラはペットじゃない！」

蛍「あはは、この子はパイモン。あなたは？」

可愛らしい声で聴いてくる蛍に対して私は軽く自己紹介し、その後、手に入れた情報を西風騎士団に話した

驚いたのは、私の戯言かもしれない報告を簡単に信じたことだ

ヒナ「どうして…私の言ったことを簡単に信じるんですか？」

ジン「なぜかって…あなたの活躍はこの騎士団の中にも届いていません。それとあなたの決意が今もお吹き続ける風なら、嘘をつく意味がない」

ヒナ「……」

ジン「大丈夫、私たちはあなたを信じています」

愚問だったと自分で実感する

調査に向かうのはリサさん・ガイア・蛍・そして偵察騎士アンバーという騎士の四人。私は、その人たちの見送りをした直後にジン団長から呼び止められて、少し話をする事になった

酒場—エンジェルズシエア

お酒好きなモンドには二店舗の酒場がある。可愛らしいバーテンダーがいるキャッツテールと、ここエンジェルズシエアだ。お酒の種類が豊富で、何でもアカツキワイナリー産のお酒が人気だそうだ

…私はお酒を飲まないからよく分からないけど、好きな人は多いとか？

ジン団長はカウンターの方へと足を運ばせ、その赤髪のマスター

に声をかけた

ジン「蒲公英酒をひとつ」

？「お前か：ジン。珍しいな」

ジン「今日は少し飲みたくなったので。それと、彼女を先輩に合わせたく思いー」

？「先輩は止める。それに、お前はまだ勤務時間内だろう？酒なんて飲んでいいのか」

赤髪のマスターはジン団長に向かって細く睨みつける。ジン団長はそれに臆することはなく、事の経緯を説明し始めた

ー結論から言うと、ジン団長の今日の仕事はもう既に終わっている。だがしかし、明日のことやこれからのことを考えなくてはいけないため、また騎士団本部へと帰らなくてはならないが、少しの休憩をするんだとか？

デイルツク「そうか。俺はここのオーナー、デイルツクだ。それで、お前はなんでこいつに合わせたかったんだ？」

ジン「簡単に言うと、あなたたちに頼みたいことがある」

ジンはカウンターに備えられた丸いイスに座り、私をその隣に呼んだ

世界と対峙する者

デイルック「…前から言ってるが、俺は騎士団とは組むつもりはない」

頼みたいことがあるとジン団長が口にした瞬間、デイルックがその言葉を否定した…その言葉には、騎士団のことを心から否定しているような感情が入っていた

ジン「わかっています。ですが今回は騎士団からの願いではありません。私からの願いです」

デイルック「…では、今はただのジンーだど？」

ジン「ええそうです。ですのー」

デイルック「要件を」

デイルックは急に態度を変え、その頼みに乗っかるようになった

デイルック「俺も乗っかることにした」

ジン「それは」

デイルック「但し、それ相応の報酬を要求するがな」

ジン団長は少し息を飲んでから、要件を話し始めた

…要約すると、近頃アビス教団と呼ばれる世界と対峙する組織が活発になってきているらしい。アビス教団はヒルチャールの言葉を理解し、使役することのでき、人類の脅威になりうる危険な存在だ

ジン団長の頼みたいことは、そのアビス教団の居場所を突き止めること

冒険者協会でも、危険な存在として認知されている存在だったから名前程度は知っていたが、まさかそのアビス教団の居場所を突き止める任務を受けることになるうとは…

ジン「目撃情報はここと…ここに」

デイルック「…行くぞ。今すぐいだ」

ヒナ「えっちよ…」

デイルックは私の手を引き、そのままエンジェルズシエアを出ていった

北風の狼の神殿 付近

私達は、風魔龍の力を観測した場所付近に来ていた

ジン団長が話してくれた目撃情報はこの近くの遺跡付近だそうで、私たちは調査を始めたのだが…

デイルツク「お前、偵察は得意か？」

ヒナ「得意…だけど、どうして？」

デイルツク「なら、お前に偵察を頼む。俺はその情報を頼りにそいつらを潰す」

ヒナ「い、いいけど…」

何故？と聞くのは野暮な気がした

私は元素視覚と感覚を頼りに近くの状況を調べ始める…南にはトリックフラワーが数匹。西には水スライム…東には遺跡守衛と呼ばれる古代兵器(?)。北には…強い水元素と多量のヒルチャール!

デイルツクは近くの状況をその場で調べていた私をまじまじと見続けた

デイルツク(…動かずに付近の様子を感知しているのか? 実に興味深い…)

ヒナ「見つけました! 北の方に強い水元素と多量のヒルチャールがいる模様です」

デイルツク「よし、じゃあ奇襲をかける。俺についてこい」

ヒナ「えっ! ちよつとー!!」

そう言い残して、颯爽と私を置いて行くように走り去っていった

デイルツクの背中を必死に走って追うが、体格の差もあるのだろうか追いつくことができず、すぐに見失ってしまった

だが、私には付近の状況を感知することができる。最悪な状態にはならないだろうけど…

ヒナ「でもさ…待っててくれてもいいじゃ——」

その時、デイルツクが走り去っていった前方から火の鳥のようなものが私の方へと迫ってくる。危機を感じた私はとっさに元素スキル「幼き夢」を発動させ、自身の身の安全を図った。シールドによって防がれた謎の火の鳥はそのまま青い空へと舞い上がりどこかへ消え去ってしまった

—あれは一体何だったんだろうか…と考えたものの何も出てこず、仕方ないので先に行ったデイルツクのもとへと急いだ

私が感知したヒルチャールや水元素の反応があった場所は、少し木が生い茂っていて付近から目視は不可能と見える。私が法器を使えて良かった—と満足していると、奥の方から剣戟の音が木々に木霊し、私の耳に届く

恐らくはデイルツクが戦っているのだろうと、思っておこう

ヒルチャール1「Yann, Derao!!」

ヒルチャール2「Moon, Nayaa!!」

ヒナ「…ヒルチャールの声が聞こえる。私も急いでいかなきゃ—」
? 「フン…小娘が…そこを退け!」

ヒナ「へ? ななな——」

突然現れた青いバリアに包まれた魔物に驚き、その魔物に元素攻撃をしてしまう

すると、その魔物は元素反応によって動きが固まり、そのまま完全に凍結してしまった

—水元素と氷元素が反応すると凍結反応が起こる。驚きが優先で考えられなかったが、普通に考えてこの魔物こそがアビス教団の魔物なんだろう（見たことないし…）

サツサツ…と草を草を踏みしめる音が聞こえたため少し警戒する

が、私のもとに現れたのはデイルツクだった

デイルツク「よくやった」

ヒナ「よくやったって…デイルツクさんおいて行ったじゃん…」

デイルツク「だが結果は見ての通りだ。こいつがアビスの魔術師（水）。お前が居なくてはこうやって捕らえられなかった」

ヒナ「それは…えへへ」

なんだかむずかゆい気持ちになる

さつきまで、デイルツクに対して抱いていた不満のような気持ちが一瞬にしてなくなってしまう。なんだか見た目や口調から他人に興味が無いような人なのかと思っていたのだが、そんなことは一切ないかもしれない。人は見かけによらずというがまったくもってその通りなのか？

デイルツクは凍結したアビスの魔術師を炎元素で溶解反応を起こし、アビスの魔術師に剣を向けた

ヒナ（へえーデイルツクさんって炎の神の目をもってるんだ…）

デイルツク「さて、尋問を開始しよう。お前の仲間はどこにいる」

アビスm「フン…お前なんかに教えるはずが——」

デイルツク「そうか。残念だ」

そういつてデイルツクは剣を地面に刺した瞬間にアビスの魔術師の首元を掴み、そのまま掴んだ方の手に炎元素を纏わせる。当然、掴まれているアビスの魔術師は直に炎元素を受け続けるため、耐え難い痛みがその体を襲うだろう

—そこで私は、改めて思った。”この人を怒らせるべきではない”と

アビスm「ギヤアアア!!わかった!話す!すべて話す!!」

デイルツク「そうか。早く話せ」

アビスm「仲間は近くの神殿の中で風魔龍の力をヒルチャールと共に守っている!我はただヒルチャールを集めてこいと指示されただけだ!だから見逃してくれ!」

デイルツク「…その言葉、真実か?」

アビスm「本当だ!だから——?」

デイルツクは突然アビスの魔術師の首元から手を放し、アビスの魔術師を自由にさせた

そのまま、遠くに蹴り飛ばしふとため息をついた。傍から見れば、自由にさせたとも見て取れる行為だったが、デイルツクはどこか笑っている

ヒナ「ちよ…逃がしているの?!」

デイルツク「俺がそうやすやすと逃がすと思うか？」

その時、夜空についさつき見たような火の鳥が大きく翼を羽ばたかせそのアビスの魔術師が飛んで行ったところに向かって飛んでいく

―その後、アビスの魔術師の断末魔がそこら中に響き渡ったのは言うまでもないだろう…

モンド城

西風騎士団本部

ジン「ご苦勞であった。ヒナ」

ヒナ「疲れましたよお…」

あの後すぐにディルックと別れた私はすぐに帰路につき、ジンさんに報告しに来ていたのである

ディルックは「あとは俺がやる」と言つて私を伝書鳩扱いしてきたんだけど、きつと何かしらの理由があるのだろう

リサ「帰ってきたわよお」

アンバー「ただいま帰りました！」

ガイア「今戻ったぞ」

蛍「戻りました」

続々と調査に行つていた人たちが帰つてきた

ジン「皆、ご苦勞であった。今回のことで風魔龍の脅威は少し抑えられたと思う。それと…ヒナと蛍」

ヒナ「はい？なんですか」

蛍「どうかしましたか？」

ジン「君たちには感謝してもしきれない。二人にはそれぞれ”榮譽騎士”と”自由騎士”の称号を授与しよう」

—なんだって——!!私なんかが——と心の中では思っていた。

しかし、実際に出た言葉は全く違うものだった

「ありがとうございます！」その一言だけが私の口から出た

しかし、騎士の称号を授与されたということは私も騎士団の人間になつてしまったということだろうか？ということとは、毎日の仕事や鍛錬をはじめとした自由とは相反するものが私の生活を支配していくのだろうか？例えば：朝6：00からモンド城内のごみ拾いとか見回りとか、昼12：00過ぎには鍛錬を開始しろとかe t c…

ジン「大丈夫だヒナ。君の考えていイルようなことは一切ない。むしろ、その称号は騎士団からの感謝と受け取つてほしい」

ヒナ「—もしかしてですが…顔に出てました？」

私がそういうとりささんがクスツと微笑み、こう告げた「可愛らしく呟いていたわ」と

しまったと自覚する。私は稀に何かを考えているとき、今見たく呟

いてしまうことがあるのだ。自分では直したつもりだったのだが：
治っていなかったようだ

ジン「まあ、気楽にいこう。これからもよろしく頼む。自由騎士ヒ
ナ・荣誉騎士蚩」

2人「はい!!」

こうして長きにわたる今日という一日が過ぎていった

大変だったなくと余韻に浸ることもあれば、自分でも夢をみている
ようだと言覚することもある。今日という日を忘れないだろうとヒ
ナは心に刻みこみながら明日に備えた

テイワットの星空は変わらない。今も、誰かの願いのために輝き続
けている

いつも通りの日常と非日常

ヒナ「……すう……すう……」

ベットは心地の良い魔具だ。古来から人はベットという寝具に取り付かれてきた

夜から朝までの安眠を支え、冬季には温かいぬくもりを与える

？「ヒナさあくん！」

ヒナ「ん……すう……」

？「寝てるのかな？」

聞き覚えのあるような声が聞こえるような……いや、夢だろう。騒がしいあの”娘”は今きつと離月で私のお母さんと働いているだろ――

――『ガチャ』――あれ？今扉が開いたような――

？「朝ですよおおおおお！！！」

ヒナ「ぎやああああ！！！」

その子の爆音な目覚ましによって私は飛び起きたのだった

数分後

シユウ……と頭から煙を出す小さな子。寝巻の私の目の前で正座しつつ涙目になっているこの子の名は”翠果^{スイカ}”。契約の国〈璃月〉を古来から守る仙人の血を引いている半人半仙の女の子だ。いたずら好きで困った子なのだが、仕事熱心でかわいいところもある。小さい頃から私はこの子を知っているし、彼女も私のことをよく知っている。それだから……遠慮がないというか……

ヒナ「こんな朝早くからなんの用？」

翠果「ううう…」 凜さん”からの手紙ですよお…なのになんで殴るんですかあ…」

ヒナ「あんたが気持ちよく寝ている人の枕もとで大声出したからでしょうが!!!」

久しぶりに怒った

ま、彼女に気を許しているからこんな素が出ても焦らないし、むしろ懐かしい感じがしていいかなーなんて思ってるところもある

そーいや、彼女がここに来た理由は”凜さん”。つまり私のお母さんからの手紙を届けに来たらしい

私は翠果からものを受け取り、中身を読もうとするが、1つ気になった。見たところ彼女の手荷物が軽い気がする…

ヒナ「翠果、あんたこれから仕事あるの?」

翠果「いや…今週、凜さんから与えられた仕事はこれだけだよ?なんでも『ヒナのところでゆっくりしなさい』ーって」

ヒナ「――」

物凄くお母さんが言いそうなことだ

翠果の働く場所の名は快天亭。店長は私のお母さんで、手紙を配達することをはじめとした仕事をしている。はじめは璃月港のみだったが、次第に広がっていきモンドや稻妻などの近隣国にも配達をしているとのこと。国際交通とかなんとか言われそうだが、国際的なことは工作上排除しているとか、だから完全プライベートのことしか受けないんだとか

ヒナ（まったく…ええとどれどれ…?）

凜『―元気にしていますか?お祖父さんが亡くなって一周忌になりますが、食生活や冒険者としての生活はしっかりしているか心配です。私は翠果と共に元気に過ごしていますが、ヒナの方はどうでしょうか?風の噂では、あなたが”自由騎士”になったと聞きます。いろいろと環境が変わりそうですが、がんばってくださいね?迎仙儀式が行われる時には、またこっちに戻ってらっしゃい』

懐かしいお母さんの自筆に瞳が潤う

私は毎年迎仙儀式の時期になると璃月に足を運ぶ。理由は…お母

さんに会いたいからだ。お母さんは訳あって璃月からは離れられな
いらしいため、私が会いに行くのだ

その時に私は稲妻にいるお父さんからのお届けのもの受け取りや
お母さんの仕事をすこしばかり手伝ったりしている

そんなことを思いだしている私の部屋を翠果はいろいろと物色を
し始める。翠果が動くと同時に彼女の小さな背中に大きく背負って
いるクリーム色のカバンが楽しそうに揺れ、それにのっかるように翠
果の可愛い鼻歌が聞こえる

彼女のかわいいところその一・夢中になると鼻歌を歌ってしまう。
ちなみに自覚はないみたい…

ヒナ「ふふっ…」

翠果「？なんでいきなり笑ったの？」

ヒナ「いや〜？…そんなことより行きたいところとかない？」

翠果「（急になに〜？気になる…）うーん…あ！」

翠果は突然何かを思いだし、私に興味深々に近づいてきてこう話し
た

翠果「ねえヒナさん！風の噂だと、自由騎士っていうのになったん
だよな？私もその自由騎士っていうの実感したい！」

ヒナ「実感っていつてもねえ〜実際することないよ？モンド城内を
ブラブラしたり…あとはいつも通りヒルチャールとか魔物の殲滅か
な」

翠果「!!楽しそう！私、それがしたい！その二つを試してみたい！」

翠果に答えるかに渋ったが、私がフォローすれば問題ないだろう。
しかも、翠果は結構腕が立つ（戦術的な意味ではなく）ため、心配は
少ないかな〜

私は翠果の頭を優しくなでて、自室を出た。翠果はルンルン気分で
私の後をついてきた

陽だまりが今日も心地よいモンド城はいつも通りにぎやかだ。冒
険に行く者や飲食店へ鹿狩り〜でご飯を食べるガイア：ガイア?!と衝
撃を受けたが、彼が仕事をサボることなど日常茶飯事だということ

最近知ったため、今更驚いたりはしない。恐らくもう少ししたら…ほら、アンバーがきて…ガイアはいつの間にか消えている

ヒナ「翠果、今お腹すいてるとかない？」

翠果「んー少しすいてるかな？」

ヒナ「よし！あそこのレストランで何か食べよう！モンドの料理を恥じわいなさい！」

翠果の手を優しくリードしながら、鹿狩りへと歩いていく

席に着いたところで、私たちは鹿狩りのメニューを

ヒナ「何がいい？」

翠果「うーん…この”モンド風ハッシュドポテト”が食べてみたい！」

ヒナ「はいわかった！サラさん！いつものとモンド風ハッシュドポテト一つくださいー！」

サラ「はい！少々お待ちくださいね！」

鹿狩りの受付係（？）のサラさんは私たちに向けて返事を返す
しばらくするとサラさんが私たちの料理を持ってきてくれた。ひとつは翠果が所望したモンド風ハッシュドポテト。もうひとつは、私
がいつも頼む”北地のりんごと肉の煮込み”だ。肉々しいものがあり好みでない私だが、この料理は好物と言ってもよいほど好きなので、肉の…筋張った触感というか脂身というか？嫌いな要素が少ない

翠果「モグモグ…これおいしいね！」

ヒナ「でしよー！ポテトのうま味とジャムの酸味がちょうどいいよね」

翠果「ヒナさんのものも少しちようだい！」

ヒナ「いいよーほら、口開けて」

翠果は恥ずかしながらも私が差し出したスプーンを口に頬張る

—少し子供扱いしすぎているかもしれないと思いつつもその姿を堪能したのだった

数分後

食事を済ませた私たちは自由気ままにモンドを歩いて何か問題はないかと見回っているが：特に問題という問題はない。いつも通りなんだけどね

問題がなく心地の良いいつものモンドだ。だからこそ何をしようか：

ヒナ「うーん：それじゃあモンド周辺に行こうか」

翠果「うん！」

一度冒険者協会のキャサリンと会話し、今日の任務と近隣情報を得てから私たちはモンド城を出た

—その情報に洩れがあることなどは：彼女たちには想像もつかないだろう：

モンド周辺の変化

さてと…私と翠果はモンド城の外へと出たわけだけど…どこに行こうかな

情報では、清泉町の近くにヒルチャールの群れ。誓いの岬の奇妙なヒルチャール。囁きの森の妖火。千風の神殿の遺跡守衛…とラインナップがすごいことになっている

よくよく考えたら…清泉町付近のヒルチャールの群れは偵察騎士アンバーがなんとかするといっていたし、千風の神殿の遺跡守衛はあそこから動こうとはしないから、下手なことさえしなければただそこを徘徊しているだけ

誓いの岬の奇妙なヒルチャールは…気になるけど、とりわけ危険そうなのは…

ヒナ「囁きの森の妖火…かなあ…」

はつきり言って怪しい感じがする…ただの噂話なのかもしれないが、本当に危険な存在なのかもしれない。噂が広がって広がって元の形とはかけ離れたものが出来上がった可能性だってある

ヒナ「翠果、本当に危険だったらすぐに隠れて」

翠果「わかってるよ。でも私にも手伝わせて♪」

…やっぱり心配だ

そう思いつつ、私は翠果と共に囁きの森に向かう

?side

…今日という日を待っていた。今モンドには西風騎士団代理団長が居ない。ということはモンドの守備が手薄になる！さらに言えば、私が偽情報を冒険者協会なるものと西風騎士団に流したため、偵察騎士と優秀な冒険者はそっちに向かうだろう…しかし私が流している情報もあつたような…

まあいい。私の使命は手薄になったモンドに忍び込み情報を得ることだ。時が来ればヒルチャールの軍団をモンド正面口に向かわせる。騎士団がそこに集結する隙に私が裏門から侵入するという完璧な作戦

——王子様のために！

ヒナ side

囁きの森

木々が生い茂り、薄暗くそびえ立っているこの森は、草花の生い茂る音や生物の声は何者かが囁いているように聞こえることから、囁きの森と命名されたという話がある

実際に来てみると分かるが、まあ不気味だ

イグサと呼ばれるモンドの特産品が群棲しているのだが、その草は暗所で光輝く性質を持つ。それも相まって不気味だったのが、さらに不気味になったという訳だ

翠果「不気味だね…」

ヒナ「まあ…ね」

すると、奥の方から肌がピリピリするような雷元素を感じ取る。翠果もそれを感じ取ったようで、私の腰を掴み少し怯えた様子で辺りを見渡している

警戒心を強めながらも私たちは囁きの森を奥へと進み始めた

…特に何事もなく森の中心部まで来これた。何か起こるのではないかと警戒していたのだが、スライム一体も出てこなかった。なんか逆に怖い…と考えていると、黒い鳥をたずさえた金髪の少女が私たちの目の前を通りすぎた

—確かあれは…冒険者協会の情報部“フィッシュル”だったっけ？

ヒナ「ね、ねえ！フィッシュルだよね！」

フィッシュル「——あら、このような麗らかな日にうす暗い森で断罪の皇女に会えるなんて奇遇ね、ヒナ」

？「こんにちは。ヒナさん」

フィッシュルの周りを飛行しているオズという名の鳥？は私に礼儀よく挨拶する

翠果はなんだか訳の分からないような顔をしていると、フィッシュルは私に翠果のことを聞いてきた

フィッシュル「その子は貴女の隠し子か何かかしら？私は断罪の皇女フィッシュルよ。逢えたことを光栄に思いなさい」

翠果「へ：へえ??？」

オズ「お嬢様は会えて嬉しいーと言っております。ちなみに私は、オズ。お嬢様を御守りするモノです。以後、お見知り置き」

翠果「そ、そうなんですネ：私は翠果！璃月から来たヒナさんの妹的な存在です！」

3人が自己紹介をしている中、私は一人不穏な気配を察知していた。先程とは何かが違う。だがヒルチャールやスライムの気配では無い。トリックフラワーか？とも思ったが、監視されているような気がするからそれも違う

なら宝盗団やアビスの魔術師だろうかー

ヒナ「——危ない！」

私は3人の目の前に立ち、元素スキルにて何者かの攻撃を防いだ。だがしかし、私のシールドは元素反応によって粉々に破壊され、辺りには涼しい空気が漂った

フィッシュル「：一体どうしたの——」

ヒナ「全員、武器を構えて！」

翠果「ヒナさん？どうしたんです——」

ヒナ「いいから!!早く！」

2人は訳の分からないまま武器を構える

——私は内心焦っていた。私の防御はかなり硬く並の攻撃じゃ破壊出来ない。それを1発で破壊したことは：かなり強いのだろう

：状況を整理してみよう。今この場所をどうするか…考えられるのは2つしかない。逃げるか戦うか…

考える暇なく、次々に攻撃が飛んでくる

私は、元素力を惜しまずにその攻撃を元素スキルで防ぐもすぐに粉砕されてしまう。ようやく攻撃が止まったと思ったときには、私の体はボロボロだった

？「フツ…私の炎を防ぐとはな…その力は認めよう！」

翠果「―何…あの魔物」

ヒナ「アビスの…魔術師！」

アビスの魔術師（炎）は、自慢げに胸を張る

アビスm「我は他の魔術師とは少し違う、エリートだ！もうすぐ、”アビスの詠唱者”になれるほど！だからこそ貴様らを消し、昇格するのだ！」

ヒナ「何を言って…」

アビスm「訳がワカラナイのだろうか？ダガそれでよい！お前たちはここで死ぬ！」

アビスの魔術師（炎）はその身に纏う炎元素のバリアを代償に巨大な火球を作成し始める。私はそのとき、死を覚悟した。防御の術がない今の状況と言い、圧倒的に強いアビスの魔術師（炎）…その時、一筋の風がその火球をかき消した

アビスの魔術師は当然のことながらその事実には驚きを隠せない。それは私もそうだった。風と言ったら翠果なのだが、彼女がここまでの力を発揮できるのか知らない。ちらつと彼女の方を見たのだが、彼女自身も驚いていた

翠果「え…!？」

アビスm「ば、馬鹿な…この我の…最大級の火球が―ぐっ！」

フィッシュル「―あら？私を忘れては、ならないわ。行くわよオズ!!」

オズ「仰せのままに！」

いつの間にかアビスの魔術師（炎）の後ろに立っていたフィッシュルはアビスの魔術師の背中に矢を放ったあと、悠々と口を開いた

その直後、フィツシユルの付近には多量な雷元素が溢れ出ていた
2人「夜の権限!!」

オズと同化したフィツシユルが、アビスの魔術師に突進していく
と、アビスの魔術師は後方へとぶっ飛んでいった

私が負った傷は翠果の治癒能力で回復したため、地面に伏せるアビスの魔術師に近づくと、アビスの魔術師は何かを呻きながら感嘆していた

アビスm「ー王子様…：我は…：貴方のように…」

ヒナ「王…：子様？」

アビスm「…：…」

致命傷を負ったアビスの魔術師は、元素の粒子となり、囁きの森の空へと散っていくー私たちは一応依頼を達成したということで、冒険者協会へと赴き、報酬を山分けすることとなった

フィツシユルとはそこで別れ、鹿狩りで昼食を済ませてから西風騎士団の図書館へと行くことにした

???
side

ここは風龍廃墟。旧モンド時代に暴君デカラビアンが治めていた
廃棄された城跡。今は風魔龍へトワリンが住居としている場所だ

俺はそこで1人、この世界をどうするか考えている

?「…：王子様」

俺が仕切る組織へアビス教団の部下が俺に話しかけてきた
?「なんだ」

部下「12族5番の炎魔術師が死にました」

?「…：理由を聞かせて貰えるか？」

部下「はっ…：奴は独断でモンドの情報を得ようと1人で囁きの森へ

と出向き、そこで2人の冒険者と1人の璃月人の手によってのよう
す」

? 「……」

俺は少し考えた

確か彼はかなりのエリートであり、郡を抜いてトップクラスの元素
力を持っていたはずだ。彼を倒せるのがいるとは…

? 「予想通り…とは行かないな」

部下「ではどうしましょうか」

? 「だが…予定通りの日程に奇襲をかける。ヒルチャール・武器の
用意をしろ!」

部下「はっ!!!」

部下は瞬時に姿を消し、ここは再び静寂が訪れる

執行者がモンドの機密情報を盗んで来れば、あとは簡単だろう…

? 「―蛍…いつか…また会えるだろうか」

俺が放った声は風龍廢墟を流れる風によってかき消された